

2021年6月13日聖霊降臨後第3主日説教

エゼキエル書31章1節-6節、10節-14節

コリントの信徒への手紙二5章1節-10節

マルコによる福音書4章26節-34節

急に日差しが厳しい気候となりました。教会は高台にありますので、光が大変良く当たります。代沢の地で夏をまだ過ごしておりませんが、暑さがより厳しくなるころには、マスクを外して皆様と一緒に礼拝を捧げられればと思います。

本日の旧約聖書は、「エゼキエル書」です。本日の箇所は、主なる神様が諸外国への裁きについて語っている部分に含まれます。ここではエジプトへの裁きを語っています。

このイスラエルの神様が、他の国々の裁きを語るということ、このことはすこし不自然に感じます。なぜならば、通常、神という存在は、一つの民族・集団のためにあり、その直接的影響力は、その中にとどまるからです。しかし、『聖書』の主なる神様は、天地万物を創造された方であり、イスラエルの神様であると同時に、すべての民・国民の神様です。それゆえ、その裁きはイスラエルを超えるのです。

しかしながら、現代は様々な状況において、多様性を容認することが、重要な価値観の一つとなっています。それは宗教・神観にも及んでおり、20世紀末には「宗教多元主義」という言葉も用いられ始めました。それは、ひとつの地域に存在する諸宗教が、相互に排他的・対立的になるのではなく、相互に存在を認め合い、良好な関係を持つということです。「宗教多元主義」という概念自体については、賛否両論ありますので、これ以上深く立ち入りませんが、排他的な教会絶対主義のような考え方は、再考すべき事柄であると思います（聖公会はそもそもそうではありませんが）。

それでは、すべてを相対的に考えて、神観についても、時代、文化、人によって異なるものであり、文化を構成する要因の一つと考えればよいのかというと、そうでもありません。それでは、すべての行動が人間の価値観・判断観にゆだねられてしまうからです。あるいは質的量的に強い文化が、ほかの文化を凌駕するだけになってしまうからです。人間一個人であれ、一つの文化であれ、自己の価値観や判断の枠組みを自己努力だけで超えることは困難です。そのような状況を克服するためには「他者」と対話をして、なんらかの飛躍をすることが必要です。だからこそ、個人間、文化間の対話や相互理解が大切だとされるのですが、そのように考えるとき、『聖書』が示す主なる神様は、支配者としての存在するのではなく、「絶対的な他者」（他に交換できないという意味で）として存在し、信じる者にかかわってくださる方であることがわかります。また、信じる者に愛をもって、かかわってくださる方であることがわかります。その意味では、主なる神様は、わたしたちにとって、自分たちの思いを超えた歩みをするために、大切な存在であることに変わりありません。

前置きが大変長くなりましたが、本日の旧約聖書を見ていきたいと思います。最初に「**第十一年の三月一日に、主の言葉がわたしに臨んだ**」(エゼ：31：1)とあります。この「**第十一年**」とは、何から数えて11年かと言いますと、ヨヤキン(エホヤキン)というユダヤ王国の最後から二番目の王が、バビロニアに連れ去られてから数えて、と考えるのが一般的です。教会の暦(西暦)が、誕生するまでは、ほとんどの国や地域では、歴史の年数の数え方は、王や支配者の治世で考えますが、自分たちの王が捕虜となって何年という数え方は、なんともすごい歴史観です。歴代誌下には、「**ヨヤキムは二十五歳で王となり、十一年間エルサレムで王位にあった。彼は自分の神、主の目に悪とされることを行った。その彼をバビロンの王ネブカドネツアルが攻めて来て、青銅の足枷をはめ、バビロンに引いて行った**」(歴代誌下 36：5-6)とあります。この記述からすると、預言者エゼキエルは、もうすぐ自分の属する国が滅ぶという時に、そのことをしるしとして、諸外国への裁きを語っているのです。そのことを語らなければならない預言者も大変だと思いますが、自分の大切な王国が滅び、その民が辛い目にあうことを容認する主なる神様も、人知を超えています。この世界に真の平和を求めているからの選択でしょう。このことから、主なる神様が、イスラエルの神様であると同時に、天地創造の神様であるという意味が解ります。

預言者エゼキエルは続けます。「**人の子よ、エジプトの王ファラオとその軍勢に向かって言いなさい。お前の偉大さは誰と比べられよう。見よ、あなたは糸杉、レバノンの杉だ**」(エゼ 31：2)。ここからエジプトの偉大さをほめたたえる個所が続きます。たとえられている「**レバノン杉**」は、杉とありますが、マツ科の木です。大木になる木が多く大変利用価値の高い木であったがゆえに、紀元前の時代から伐採されすぎで、現在では、ほんのわずかししか残っていないそうです。森林破壊という、技術の発達が進んだ近・現代人の所業と言われることが多くあります。また地を従わせようとする『聖書』の価値観がそうさせているともいわれることもあります。しかし、人類は、『聖書』と無関係の文化の中でも、かつ手作業でも、経済的目的のために盛んに切り倒して、レバノン杉をほぼ切りつくす寸前までに至ったようです。ただし、この記述があることから推測しますと、「エゼキエル書」の時代は、まだ身近にレバノン杉が残っていたのででしょう。

エジプトの偉大さを、レバノン杉にたとえてほめたたえる部分の詳細は、聖書日課では省略されていますが、預言者エゼキエルの目的は、エジプトをたたえることではありません。エゼキエルは続けます。「**それゆえ、主なる神はこう言われる。彼の丈は高くされ、その梢を雲の間に伸ばしたので、心は驕り高ぶった**」(エゼ 31：10)。エジプトは強大な国であるが、だからおごり高ぶった、それゆえ、主なる神様は、「**彼を諸国の民の最も強い者の手に渡す**」(エゼ 31：11)と高くほめたたえた後に、厳しく批判するのです。

このエジプトに比べますと、主なる神様が建てたイスラエルは、かなりの小国です。小国であるばかりか、成立後王が3代(サウル、ダビデ、ソロモン)続いただけで、南北に分裂し、エゼキエル書の時代には、北イスラエル王国はすでに滅んで約200年が経過していました。残る南のユダ王国ももうじき滅

びようとしていました。それに対して、エジプトは、イスラエル以前も、イスラエル以後も紆余曲折はあっても、長い歴史を持つ強大な王国です。しかし、そのようなエジプトも、本日の個所の最後にある通り、「**彼らはすべて死に渡され、穴に下る人の子らと共に地の深き所へ行く**」(エゼ 31 : 14) と主なる神様は、エゼキエルを通して語るのです。

北イスラエル王国を滅ぼしたのは、アッシリアであり、南ユダ王国を滅ぼしたのは、バビロニアです。エジプトは、直接イスラエルの滅びとは関係していませんが、常にイスラエルの南にあって、強大な国であり、エジプトがどう動くかは、当時の中東情勢には大きな影響がありました。

この歴史の流れから何を学ぶのか、それが課題です。エゼキエルは、このような出来事の当事者ですが、彼にとって今体験している出来事が、未来に大きな意味を持つ事柄だととらえています。そして、エゼキエルにとって学ぶことはただ一つ、人間が人間であることを自覚して、イスラエルも他の諸国民も、主なる神様に立ち返ることです。

それはイスラエル中心の一方的な考えではないかと思えます。冒頭に見た通り、それぞれの文化があり、神がいて、そんな排他的なことを語って良いのかと思ってしまいます。あるいは神的存在を認めるというような古い価値観が、未来に向けた、クリエイティブで意識の高い人類が造る、多様性の容認に満ちた、新しい世界を造る妨げになっている、というような意見もあると思います。しかし、ここで語られている事柄は、どのような人間がどれほど知恵と力を用いたとしても、強大な国がいつか滅ぶように、真の平和にはいたらないということです。その人間の枠組みを超えて、真の平和に至るには、主体的に心から主なる神様に立ち返ることが大切であると語っているのです。

それでは、どうやって、イスラエル以外の人々が、主なる神様、すなわちイスラエルの神様の方を向くのでしょうか。それはイスラエルが模範となってそのように促すしかありません。これはなかなか実現しない事柄でした。現在は、イスラエルという国家がありますので、さらに話が複雑になっています。しかし、『聖書』の舞台となった地域が、主なる神様の寛容と愛に満ちて、民族や文化の違いを超えて、平和に暮らす地域となっているのであれば、世界に対して模範としてメッセージを示すことはできると思います。

しかし、『聖書』は、その模範をイスラエルという限定を超えても示しています。それはイエス様を通して建てられる、わたしたちの教会です。その教会が各地域に存在し、模範となることを求めています。わたしたちの教会もその一つです。しかし、教会の示し方は、「旧約」に記されてきたイスラエルの歴史とは少し異なります。ことに「命」にかかわることが異なります。そのことが、本日の使徒書と福音書に示されています。

本日の使徒書は、「コリントの信徒への手紙二」です。そこには「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです」(二コリ 5 : 1) とあります。ここに書かれていることは、永遠の命

の約束です。死が終わりではないと信じる時、本当の希望が現れることを示しています。このことは、「エゼキエル書」が示していたこと、あるいは、イスラエルという選ばれた国・集団の役割と無関係のように思えます。確かに、「旧約聖書」は、永遠の命、ことに死後の命に関する明確な記述はありません。「旧約聖書」のイスラエルの歩みは、地上での事柄が中心です。しかし、パウロは、永遠の命の希望があるからこそ、その地上での歩みも深めることができると語っています。永遠の命の希望があるからこそ、イスラエルはよりイスラエルであることに徹することができる、そして、それが教会であると語っているのです。

また、本日の福音書「マルコによる福音書」でイエス様は、その希望を「神の国」という表現を用いて、それに向かってどのように歩むべきかをたとえて語ります。イエス様は、「**神の国は次のようなものである**」と語り、人間がまいた種であっても、知らないうちに成長していくこと告げます。次に「**神の国を何にたとえようか**」と語り、人間が関心をよせないような小さなからし種であっても、思いもよらない大きな植物になることを告げます。人間は、パウロが示した希望に向けて、良い種を選び、また良いまき方をするように歩むことが大切です。しかし、成長させる方は主なる神様であり、そこには人間の思いを超えた働きがあります。つまり、わたしたち人間は、主なる神様が守ってくださることを信じ、すべてをゆだねて、今できることを行いながら、永遠の命を希望として歩むことが大切なのです。そのように歩むとき、本当の平和がこの世界に来る、イエス様はそのように語っています。

もうすぐ「代沢中町会ホームページ2021」が起動するようです。いわゆるベータ版が示されました。そこには、「北澤八幡神社」、「森巖寺」と並んでわたしたちの「東京聖三一教会」とあり、神道、仏教、キリスト教と伝統的な宗教が並んでいます。わたしはまだこの地に住んで3か月ですから、詳細は分かりませんが、何かを共通の目的として互いに補い合うことは、大変素晴らしいことだと思います。ただし、異文化の共存は簡単ではありません。まず対話や交流からという意見が一般的ですが、対話も交流も求めない文化もあります。まず対話からという発想は、わたしたちがそのような価値観にあるからです。それゆえ、そのような事柄を超えて、三つの宗教的施設が隣接していることが、訪れた人に、言葉を超えた安らぎと平和を感じさせることが大切だと思います。

「エゼキエル書」から約2500年、教会が誕生してから約2000年、異文化の共存が良い形で達成された歴史は、まだないと思います。それは人間の知恵と力では不可能だからかもしれません。だからこそ、わたしたちが主なる神様を信頼しながら、歩み続けるのです。本日の特禱にある通り、主なる神様は、「人の思いに過ぎた良い賜物を備えてくださる」方です。その方から歩むべき道を示され、それを真の平和に至るまで、教会で具体化しながら歩むのです。わたしたちにとって、その具体化の代表は礼拝です。今はそれを新型コロナ・ウイルスのために十分に行うことはできません。しかし、離れても共に祈ることはできます。今までとは異なる形でも礼拝は行われています。コロナにも負けない歩みを、これからもご一緒に続けたいと思います。